

⇒ 論 説 ⇐

英語教材開発への言語学的知見の活用*

大 竹 芳 夫

1. はじめに

生成文法理論, 認知文法理論, 意味論, 語用論研究のめざましい発展により, 英語母語話者が場面や文脈に応じて英語表現を適切に選択するメカニズムが次第に明らかにされつつある。こうした研究成果の中には, 英語教育に直ちに活用できる役立つ知見も多い。しかしながら, そうした有用な研究成果が必ずしも十分に英語教育に反映されているとは限らないように思われる。本研究では, 中学校教科書を分析しながら, 言語学の知見が教材開発に適切に活用されているかを検証する。また, 言語材料を学習者に提示する際に留意すべき点についても考察する。

2. 日本語に起因する文法エラー

日本人英語学習者に観察される文法エラーは母語である日本語に起因することがしばしばある。たとえば, 中学校で学習する基本的な他動詞に know があり, (1) のような基本文の習得を目標にしている中学校教科書がある。

(1) This is Mike. Do you know him?

(文部科学省検定済教科書中学校外国語科用 *New Horizon* 1, Unit 8, 東京書籍)

(1) の基本文を挙げる同教科書は次のような空港での会話場面を設定し, 基本文の自然な導入を試みている。下線は筆者が施している。

(2) A : Do you see that tall man? That's Hideki.

B : Do you know him?

A : Yes. He's a baseball player.

* 本研究は, 平成21-23年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号21520502「日英語の名詞節化形式の意味と談話機能の派生メカニズムに関する理論的・実証的研究」(研究代表者: 大竹芳夫) の研究成果の一部である。

A : Do you see that woman with short hair?

B : Yes! I know her. That's Meg.

(文部科学省検定済教科書中学校外国語科用 *New Horizon* 1, Unit 8, 東京書籍)

(2) は次の (3) のような日本語に対応する会話を想定しているものと思われる。

(3) A : あの背の高い男の人が見える? あの人はヒデキだよ。

B : 彼を知っているの?

A : うん。彼は野球選手なんだよ。

A : あのショートヘアの女の人が見える?

B : ええ! 彼女を知っているわ。 あの人はメグよ。

一見すると (2) は自然な談話であるように見えるが, know を含む下線部の英語は次の (4) のように修正する必要がある。

(4) A : Do you see that tall man? That's Hideki.

B : Do you know {of / about} him?

A : Yes. He's a baseball player.

A : Do you see that woman with short hair?

B : Yes! I know {of / about} her. That's Meg.

中学校英語教科書に示されている (2) の会話場面では, 談話の参加者が野球選手のヒデキや有名女優のメグと面識がある知り合いであることを問題にしているわけではない。ヒデキやメグのことをテレビや雑誌などで知識として知っていることを問題にしているのである。万一, 教科書の作題意図が面識を前提としており, “Do you know him?” と “I know her.” を「彼と知り合いなの?」と「彼女と知り合いなのよ」と解釈することであっても, 後続する文脈での “Yes. He's a baseball player.” や “That's Meg.” という情報提示だけでは応答としては不自然である。もし, 話題中の人物と知り合いであることを作題の意図とするならば, “Yes. He was my classmate. He's a baseball player.” であつたり, “I've ever talked with her.” のような面識があることを明確に保証する文脈を後続させなければならない。日本語では, 面識がなくても知識として対象を認識している場合には (3) に示したように「彼を知っているの?」, 「彼女を知っているわ」といった具合に表現してもよいが, 「の／について」を補って「彼 {の／について} 知っているの?」, 「彼女 {の／について} 知っているわ」と発話

すればあいまいさが排除される。日本語の「知っている」は、直接会って知っているという場合でも、間接的に知識があるという場合でも区別をすることなく用いることができる。しかしながら、英語では面識と認識とは形式により明確に峻別される点に注意しなければならない。Swan (2005) は know と “know {about / of}” の相違について次のような説明を与えている。

(5) *know and know about / of*

Know + object is used mainly to talk about knowledge that comes from direct personal experience. In other cases, we normally use know about / of, have heard of or another structure. Compare:

You don't know my mother, do you? ~ No, I've never met her.

We all know about Abraham Lincoln. (NOT ~~We all know Abraham Lincoln.~~)

(Swan 2005)

Swan (2005) は、know + 目的語が主に使われるのは個人的な直接経験を通して得た知識について伝える場合であるが、それ以外には “know {about / of}” や “heard of” などの他の構文が通例は用いられると述べる。中学校英語教科書の中には、“know about” を比較的詳しく扱っているのものもある。

(6) Kenji: Do you know about Mother Teresa?

Yoko: Yes. I know about her. / No. I don't know about her.

(文部科学省検定済教科書中学校外国語科用 *New Crown 1*, Lesson 5, 三省堂)

(6) を掲載する *New Crown 1* は about の導入箇所では “know about” に「～について知っている」という注記を与えながら20世紀を代表する有名人の写真を言語活動の題材として、面識ではなく知識として有名人のことを知っているかを問題にする質問応答の練習を設定している。先に観察した (2) の文法エラーは、日本語に起因するタイプのものであり、日本語の「～ {について / のことを} 知っている」が間接的な知識を表現するのに対して、「～を知っている」が間接的な知識のみならず直接的な経験を通して知識を得る面識まで包括するところに起因すると考えられる。

実際の言語資料を観察しよう。次例では、“I know of him, but I don't know him.” といった表現が用いられ、「私は彼のことを知っているが、直接の面識はないのだ」という具合に知識と認識とが対照的に聞き手に伝えられている。

- (7) Wright also blasted Atkins for doing what Deputy Mayor Pro Tem Dwaine Caraway tells him to do. Atkins says he doesn't know Wright and won't respond to his criticism. "I know of him, but I don't know him," he says.

(http://blogs.dallasobserver.com/unfairpark/2009/01/lipscombs_grandkid_makes_battl.php)

ところで, Swan (2005) は "know of" と "know about" の相違については説明を与えてはない。しかし, 実際の言語データを観察すると, 次のような用例が確認できる。

- (8) I asked Johnson to name the people he considered to be the greatest Olympians of all time. He chose Jesse Owens, Carl Lewis, Nadia Comaneci and Mark Spitz, and then hesitated, thinking of a fifth. Maybe he was toying, immodestly but not unreasonably, with the idea of proposing himself. Anyway, I prompted him with the name of Steve Redgrave. He shook his head apologetically. "I know of him, but I don't know much about him," said Johnson of the man who was recently voted Britain's supreme sporting achiever of the past 100 years.

(<http://www.independent.co.uk/opinion/columnists/brian-viner/the-most-unsporting-team-at-the-olympics-557595.html>)

(8) の例では, "I know of him, but I don't know much about him" という一文で "know of" と "know about" とが対照的に用いられ, 「私は彼のことを知ってはいるが, あまり詳しくは知らないのだ」という意味が表現されている。この例が示すように, "know about" は about が「周囲」を表すことから「~についての周辺の知識, ~を取り巻く知識」といった個別的な意味を表すと考えられる。

さて, ここまでは「know + 目的語」と「know {about / of} + 目的語」の意味の相違を中心に観察してきた。こうした文法現象は, この問題だけではなく, 自動詞と他動詞の対立に敷衍できる。Huddleston and Pullum (2002) が挙げる (9)-(11) の a - b の意味的な対立に目を向けよう。

- (9) a. The horse kicked me.
b. The horse kicked at me. (Huddleston and Pullum 2002)
- (10) a. He cut the meat.
b. He cut at the meat. (*ibid.*)
- (11) a. They shot him.
b. They shot at him. (*ibid.*)

(9)-(11) の a 文と b 文とはお互いに形式が違っており、意味的な対立があることを Huddleston and Pullum (2002) は説明している。例えば、「その馬は私を蹴った」という意味の (9a) は「馬の蹴り」が私に接触したことを伝えている。一方、「その馬は私をめがけて蹴った」という意味の (9b) は馬が自分のほうに蹴ってきたことを伝えているだけであり、(9a) のように実際に「蹴り」が私に接触したという含みはない。(10b) は、彼が肉を切ろうとはしたことは伝えているが、(10a) のように実際に彼が肉を切ったというところまでは保証していない。(11b) は彼らが彼を撃ち損じた可能性もあり、(11a) のように撃ち当てたという意味は伝えてはいない。

- (12) a. She climbed the tree.
 b. She climbed up the tree. (Huddleston and Pullum 2002)

(12a) には、彼女が木のとっぺんまで登りきったという含みがあるのに対して、(12b) にはそのような含みはない。

- (13) a. Kim met the Dean.
 b. Kim met with the Dean. (Huddleston and Pullum 2002)

Huddleston and Pullum (2002) によれば、(13b) は計画された会議で出会ったといった状況を示唆するが、(13a) はバスの車内で偶然に出会ったなど、さして重要でもない出会いについても用いられるとのことである。Huddleston and Pullum (2002) の記述文法的立場からの説明は、Pinker (1989) や Gropen et al. (1991) の考察に基づいていると思われる。Pinker (1989) や Gropen et al. (1991) は、「動詞の目的語は動詞の力を直接的あるいは全面的に被る (affected)」という被動性の原則を提案している。本節で考察してきた言語現象にもこの原則は働いていると考えられる。つまり、「know + 目的語」は「know {about / of} + 目的語」とは異なり、目的語が動詞 know と隣接する形式をとっている。動詞 know と目的語が直接に接しているというこの形式関係が、意味においても「目的語の指示対象を直接的に知っている (=知り合いである)」という関係に反映されるという興味深いメカニズムに支えられた言語現象である。このような形式と意味の対応関係は、Bolinger (1977) が主張する「形が違えば意味も違う (one form for one meaning)」という原理にも共通している。英語教育に携わる者がこうした知見を理解しながら自らの英語を厳しく検証してゆくことに加えて、意味と形の対応関係に学習者の関心に向け、英語の面白さ、深さを気づかせる工夫をしたい。

3. 意味拡張を受けた単語の取扱い

ことばの意味は社会の変化や時代の流れに応じて絶えず意味の拡張をする。コミュニケーションに役立つ英語教材を開発するためには、教材に記載する英語は英語母語話者にとって自然な表現でなければならない。時代遅れの古い用法や語義の使用が不適切であることはもちろんである。しかし、逆にまだ定着しているとはいいがたい用法や語義を教科書に取り込み学習者に提示することにも留意しなければならない。たとえば、meet という中学校で学習する基本動詞について考えよう。Meet は「～と会う／出会う」という意味を表す。小西編（1980）では meet の特性について次のような説明を与えている。

- (14) この語は基本的に「違った方向からやって来る複数の人・物が、偶然にあるいは計画的に出会う」ということを表す。一般に「S<人>がO<人>に会う」のほか「S<人>がO<人>を出迎える」の意でも用いられる。この意ではOには bus, train などの乗物もくる。さらに、発展的に「S<人>がO<人>と知り合いになる」の意でも用いられる。<以下、省略> (小西編 1980)

(14) の後段に meet が「発展的に「S<人>がO<人>と知り合いになる」の意でも用いられる」との説明がある。ここでの「知り合いになる」という意味は、お互いが直接に対面して知り合いになったという意味を第一に想定していると考えられる。小西編（1980）は次のような例を挙げている。

- (15) We met each other at the party. (小西編 1980)

(15) では、パーティー会場でお互いが向かい合って挨拶を交わすなどして「会う」という意味で meet が使用されている。しかしながら、実際の言語資料を観察すると、直接に対面して挨拶を交わすことがなかったとしても、「出会い」が読み取れるような場面で meet が用いられる例が確認できる。

- (16) Her cousin confirmed that she was going to see a man she had met on the Internet.
(5-million-Wordbank from the Bank of English, HarperCollins Publishers 2001)

(16) は「彼女のいとこは、彼女がインターネットで出会った男と会う予定だということがはっきりとわかった」という意味を表す。(16) の meet はインターネットというバーチャル空間での「出会い」を表しており、お互い直接に対面しての「出会い」を伝えているのではない。こうしたサイバー空間での「出会い」を表す meet の用例は手元の辞書には一例も挙げられてはい

ない。しかしながら、(14) に示した小西編 (1980) の「違った方向からやって来る複数の人・物が、偶然にあるいは計画的に出会う」という meet の特性説明は、現実世界の空間での出会いを表す用例のみならず、インターネット上のサイバー空間での出会いを表す拡張した意味・用法にも適用できると考えられる。つまり、こうした用例は、インターネットに接続をしている人同士がインターネットフォーラムやチャットに集い、メッセージのやり取りを通して出会う場合にも meet が用いられる意味拡張の例であるとみてよい。では、手紙の文通を通して見知らぬ人と情報交換をし、そして友好関係を築くような場合にも meet を使用できるのであろうか。文通もインターネットも対面せずに情報交換ができる点で共通している。しかしながら、インターネットとは異なり、手紙のやり取りを通してお互いが友好関係を築いたとしても、meet を用いることはできない。次に示す英英辞典の penfriend の定義を確認しよう。

- (17) a. Penfriend: (Brit.) a person with whom one becomes friendly by exchanging letters, especially someone in a foreign country whom one has never met.

(*Oxford Dictionary of English*)

- b. A pen-friend is someone you write friendly letters to and receive letters from, although two of you never met.

(*Collins COBUILD Advanced Dictionary of English*)

(17a-b) の定義中の下線部が示すように、手紙のやりとりが交わされているような友好関係にある人同士であっても meet は使用されない。つまり、meet は「違った方向からやって来る複数の人・物が、偶然にあるいは計画的に出会う」という特性をもつが、文通はお互いが違った方向からやってきてどこかで出会うわけではなく、お互いの住所に手紙をやり取りするだけであるから、meet の使用が認可されないと思われる。

サイバー空間上の出会いに meet が使用される実際の言語資料の観察を続けよう。

- (18) a. Last week, a 27-year-old Maine resident was sentenced to three years in prison for his relationship with a 14-year-old girl he met on the site. She claimed to be 19 in her MySpace profile but he continued to pursue the relationship even after learning her real age.

(<http://www.wired.com/politics/law/news/2006/02/70254>)

- b. A 14-year-old girl in the US is currently suing the site after she said she was sexually assaulted by a 19-year-old who she met on MySpace.

(<http://news.bbc.co.uk/2/hi/technology/5101942.stm>)

- c. In a case in Texas last year a judge ruled that the company should not be held responsible after another underage girl - referred to as Julie Doe in court papers - was assaulted by a man she met on the site. "If anyone had a duty to protect Julie Doe it was her parents, not MySpace," the judge wrote. This week a Virginia man pleaded guilty to kidnapping and soliciting a 14-year-old girl he met on the site.

(<http://www.guardian.co.uk/technology/2007/jul/26/news.usnews1>)

(18a-c) はソーシャル・ネットワーキング・サービスである MySpace での出会いをきっかけに未成年者が犯罪に巻き込まれてしまった事件についての記事である。いずれの例においても meet は「出会い」を表しているが、お互いが対面して直接会ったわけではなく、インターネットのウェブ上での出会いを表現している。日本語でも「出会い系サイト」という言葉が定着しており、サイバー空間上で知り合いになる場合にも「出会い」という言葉が使われているという類似点は興味深い。インターネットの急速な発達に伴って、こうした形態の出会いは今後ますます増えると考えられる。

もちろん、ウェブ上での出会いを表す meet が常に犯罪と結びつくような否定的意味で用いられるわけではない。次例を見てみよう。

- (19) Trish McDermott says the idea of going online to meet strangers took some getting used to, back when Match.com started in 1995. "Some of our very first successful - couples - people that actually met on the site, fell in love, and got married, would tell us that they would lie to their friends and family members about how they met," said Trish McDermott.

(<http://www.voanews.com/english/archive/2003-02/a-2003-02-21-34-More.cfm?moddate=2003-02-21>)

(19) では、ウェブサイトで出会った者同士が幸運なことに結婚に至ったが、出会った経緯については友人や家族には本当のことを言わないつもりであるということなどを伝えている。(19) の meet は、(18) のような否定的な談話で用いられているわけではない。しかしながら、次の(20) の例が示すように、親しい友人関係がインターネットで出会った多くの仕事仲間やチャットルームの仲間の関係にとってかえられてしまったという希薄な人間関係を伝える記事において meet が用いられている。

- (20) The researchers find close friendship has been replaced by a multitude of “semidetached” work colleagues and “chatroom chums” met on the internet.

(<http://www.timesonline.co.uk/article/0,,2087-2415885,00.html>)

本節で観察してきたように、サイバー空間上の出会いに対して meet が用いられている実際の言語資料は少なくない。お互いが物理的空間のみならず、オンライン上の仮想空間で出会うような場合にも meet が使用されるという意味定義や用例は辞書にはまだ反映されてはいないように思われるが、インターネットの急速な普及を考えるとこうした meet の意味や用例が辞書に掲載されるのは時間の問題であると考えられる。しかしながら、こうした meet の意味・用法を英語学習入門期の学習者向け教科書に掲載する場合には、まずは meet が物理的空間での出会いを表す基本的な用例から導入するなど提示順序に十分に配慮する必要がある。同時に、こうしたオンライン上の出会いはお互いの匿名性が高いことから、事件や人間関係の希薄さを伝える文脈で meet がしばしば使用されているという事実を考慮すれば、その教材内容の作成には慎重であってありすぎることはないように思われる。

4. ま と め

本研究では、英語教材を開発してゆくうえで留意すべき事項を文法的観点から考察した。平成20年7月に告示された新学習指導要領の中学校外国語（英語）の「言語材料の取扱い」の項に「文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」と明記された。コミュニケーションに役立つ英語教育の実践が求められている今日、学習者の文法意識を喚起し、英語を面白く、わかりやすく、そして深いレベルで指導するためには、指導者自身が言語研究の最新成果を理解し、活用する姿勢と努力が一層求められると考える。

参 照 文 献

- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.
- Gropen, Jess, Steven Pinker, Michelle Hollander and Richard Goldberg (1991) “Affectedness and Direct Objects: The Role of Lexical Semantics in the Acquisition of Verb Argument Structure,” *Cognition*, 41, 153-195.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小西友七（編）(1980)『英語基本動詞辞典』東京:研究社出版.

- Otake, Yoshio (大竹芳夫) (2001) "Application of Linguistic Knowledge to English Teaching: from the Viewpoint of Recent Semantic and Pragmatic Studies," *JBAET Journal*, 5, 87-105. The Japan-Britain Association for English Teaching.
- 大竹芳夫 (2008) 「教科書で扱われる英語の文法:新しい言語理論と教材開発の視点から」『平成19年度文部科学省委託事業「英語指導力開発ワークショップ」報告書』(平成19年度英語指導法開発事業(通称:英語指導力開発ワークショップ事業)) 159-168. 長野:信州大学.
- 大竹芳夫 (2008) 「4技能のバランスを考慮した指導法:バランスあるフィードバックと文法意識を高める指導の観点から」『教科研究中学英語』 第112号, 2-3. 東京:学校図書.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey N. Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, Michael (2005) *Practical English Usage*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.

辞書

- Collins Cobuild Advanced Dictionary of English*. (2009) Boston: Heinle Cengage Learning & Glasgow: Harper Collins Publishers.
- Oxford Dictionary of English*. (2005) Oxford: Oxford University Press.